

琉球大学学術リポジトリ

実践記録 : 「国語科教育法Ⅰ」

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2022-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 裕美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017895

実践記録：「国語科教育法I」

吉村裕美¹

1. はじめに

本稿は、2018年度に前任校である甲南大学(私立：兵庫県)で行った「国語科教育法I(3年前期)」の実践記録である。

この授業の位置づけを確認するために、簡単に甲南大学の教員養成課程における教科教育法(国語科)の流れ(当時)を示すと以下のようなになる。

- 2年次 国語科教育研究I(前期)II(後期) <教職課程科目>
担当：非常勤講師(大阪教育大教授²)
- 3年次 国語科教育法I(前期)II(後期) <教職課程科目>
担当：吉村裕美(日本語日本文学科教授、元大阪府立高等学校国語科教諭)
- 3年次 国語教育研究(前期) <学科専門科目>※基本的に教職課程履修者が参加
担当：非常勤講師(元兵庫県立高校校長)
- 3年次 国語科教材研究(後期) <学科専門科目>※基本的に教職課程履修者が参加
担当：日本語日本文学科教授(近現代文学)
- 4年次：教育実習 <教職課程科目>
担当：吉村裕美
- 4年次：教職実践演習 <教職課程科目>
担当：教職教育センター所属教授³ + 吉村裕美

¹ 言語研究では「八亀裕美」、国語教育関係では「吉村裕美」を使用している。

² 担当者の肩書きは、すべて2018年当時のものである。

³ 一人で担当した年度もある。

特徴としては、教職課程科目を、学科(日本語日本文学科)の教授が担当しているという点、および、学科の専門科目として、現場を知っている非常勤講師による実践的な授業(国語教育研究)や、学科の教授による教材研究に特化した講義を配置しているという点が指摘できる。

本稿で報告する「国語科教育法Ⅰ」は、2年次の学習をベースに、より実践的な理論を身につけ、後期の「国語科教育法Ⅱ」で行う模擬授業(この授業では模擬授業とそれに基づく定期考査の問題作成を行う)に向けて、必要な準備を行い、教育実習へとつなぐ役割を持っている。

吉村が、甲南大学で教科教育法を担当したのは、在職期間である2012～2018年度である。そのうち、最終年度となった2018年度の内容を報告する。

甲南大学の教職課程は厳しいことで知られており、大事なガイダンス関係に理由無く遅刻するだけで、卒業と同時に免許を取得することが困難になる。また、1年次のGPAが低い場合には、課程への登録自体ができない。

途中でドロップアウトする学生も少なくないが、最後まで課程に残った学生は、教員志望が明確である。また、教職教育センターの手厚い指導⁴もあって、かなりの学生が現役で教員採用試験に合格する。

具体的な数値については、甲南大学教職教育センターHPにある公開データ(<https://www.konan.ac.jp/ktec/data>)を参照。

2. 担当者の特性と授業計画の基本姿勢

担当者は、日本語学を専門とする研究者であるが、大学学部卒業後、大阪府立高校で教諭として勤務した経験がある(牧野高校4年、四條畷高校⁵7年)。また、高校退職後、大学院在学中に非常勤歴1年(天王寺高校)もある。高校教諭時代に、教育実習生の指導を数回担当し、実習前に大学でもっときちんと

⁴ 教職指導員というスタッフ(元校長など)が、各教科1名(以上)確保されており、日替わりで模擬授業や指導案の書き方、採用試験対策についてバックアップしてもらえ

⁵ 現在は「四條畷高校」と表記を改めている。

指導をしておいてほしいと切実に思うことがあった。

このような背景から、現場で役立つ教科教育法を目標に、授業を計画・実施してきた。その基本姿勢を整理して示すと、以下のようになる。

- ・職業訓練としての教職課程
- ・学習指導要領の流れと同様に「主体的・対話的で深い学び」を
- ・「ほんとうに教師になりたいのか？」を確認できる授業
- ・教師という職業の表も裏もきちんと伝える（夢と現実を）

具体的な授業計画は、次の節で示す。

3. シラバス

この授業のシラバスは以下の通りである。解説は第4節を参照。

<授業内容>

テキストを手がかりとして、国語科教育の今日的課題について学び、「国語の学習者」から「国語の教授者」へと脱皮する。

<到達目標>

(1) 科目における到達目標

新学習指導要領の内容や PISA 型読解力などを理解し、適切な教材を選び学習計画が立てられるようになる。

(2) この授業で習得・向上できる社会で役立つ能力

人間関係を形成する力

プレゼンテーションスキル

<授業方法>

講義、グループ学習、発表など。

提出物については、講義の中でフィードバックを行う。

<準備学習>

テキストの予習。

重要用語についての調べ学習。

「小テスト」(詳細は授業中に指示)の作成と採点。

教材探しと教材研究。

(毎回1～2時間程度)

<履修条件>

該当なし⁶

<成績評価>

授業中の活動状況(60%)、定期考査(40%)の総合評価。

何よりも出席と積極的な授業参加が重要視される。

定期考査は国語の教員に必要な国語常識を問う。

定期考査が一定基準に達しない場合は、単位を認めない。

<欠席基準⁷>

出席が10回未満の場合は、原則として「欠席」扱いとする。

定期考査を受験しなかった場合は「欠席」扱いとする。

<授業構成>

以下は予定であり、受講者数などにより変更がありうる。

毎回の授業は、「小テスト」「テキスト内容の確認」「課題についての討論・発表」「次回までの準備確認」によって構成される。

1. オリエンテーション／国語科教育法で何を学ぶか
2. 国語科の制度／学習指導要領と教科書
3. 発問・指示
4. 板書・ノート指導・ワークシート
5. 「話すこと・聞くこと」の授業
6. 「書くこと」の授業
7. 「読むこと」の授業
8. 言葉を育む詩歌の授業
9. 古典の授業／「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の扱い方と言語活動
10. 日中漢字文化を生かした漢字・語彙指導

⁶ 実際は、教職課程の授業であり、課程登録者以外は受講できない。

⁷ ここで言う「欠席」とは甲南大学独自の用語(GPAに影響しない単位不認定)。

11. 教室での豊かな交流活動／グループ学習の進め方
12. 国語科の評価
13. 指導計画・学習指導案の作成
14. 授業を研究して育つ教師／教えながら学び育つ教師
15. この授業のまとめとふりかえり

定期考査

<教科書>

町田守弘(編著)『実践国語科指導法「楽しく、力のつく」授業の創造：第二版』
学文社 2016

『新版四訂 新訂総合国語便覧』第一学習社

※新課程対応の新しい版、全員購入

『新訂総合国語便覧準拠ノート』(上記新版四訂便覧の準拠ノート) 第一学習社

※全員購入

<参考書・資料>

『中学校学習指導要領解説 国語編』

『高等学校学習指導要領解説 国語編』

<授業関連事項>

日本語日本文学科における普段のまなびがすべて「国語教師」になるための大事な準備であることを意識しておくこと。

<担当者から一言>

国語という教科に求められるものは、ここ数年で着実に変化してきている。「不易」と「流行」を意識し、自ら積極的に「授業づくり」ができるようになってほしい。授業外での活動が多い、グループ活動が多い、ということを理解したうえで受講すること。

4. シラバスの特徴

(1) 教科書を使用する

担当者は現場経験(11 + 1年)があるが、これがプラスに働くこともあれば、マイナスに働く可能性もある。わずか2校経験(非常勤を加算しても3校)

しかなく、自分の限られた経験だけで、偏った考えに陥っている可能性も否定できない。そこで、広い視野を確保するため、また学習内容の偏りを防ぐため、教科書を使用した。ただし、教科書の内容の説明に終始するのではなく、教科書は予習に用いて、そこから課題を見つけ、グループ学習へと誘う「反転型」の学習教材として使用した。

(2) 小テストと定期考査を実施する

日本語日本文学科に在籍しているとはいえ、受講生の基本的な知識の不足は深刻である。そのため、3年生前期に、基本的な知識を固めるため、全員に同じ国語便覧およびその準拠ノートを持たせ、毎時間、小テストを実施した。ただし、担当者が作成するのではなく、学生たちがグループ活動として、作成・実施・採点・返却・解説を行った。この活動を通して、学生たちは小テストの作り方や、採点の仕方、解説の方法などを学ぶ。最初は指示しなければ、氏名を書く欄を用意することも忘れがちであり、また解答スペースの大きさも配慮が足りない状態であるが、徐々に改善されていく。

そして、前期の最後には、担当者が作成した総仕上げの定期考査が待っている。この試験で一定の点数が取れなければ、この科目の単位は認定されない(=4年生で実習には行けない=卒業と同時に免許は受け取れない)。一見厳しいようではあるが、この関門を突破するために、国語の教職課程の学生は集まって勉強をするようになり、この習慣が採用試験対策まで続いたことは、大きな意義があった。よく言われるように、採用試験対策は団体戦である。

(3) 授業運営の模範を示す

<授業構成>の「テキスト内容の確認」の部分は、担当者が前に立ち、板書をしながら、講義を行う。10分前後であるが、この中で、授業のときの話し方や板書のあり方の模範を示す。ときにはICTなども取り入れて講義することで、さまざまな器具やサイトの紹介も行う。

(4) 反転型の活動を行う

毎時間、予習課題が課されており、学生は予習指示に従って、何らかの準備(プリント作成等)をしてくる。授業の後半は、グループに分かれて、報告をしたり、発展的な課題に取り組んだりする。グループのメンバーは基本的に毎

回変わるが、内容によっては、固定的になることもある(例：校種別など)。この活動を通じて、学生たちは自分の教員としての適性の有無や教員志望の強さを他の受講生との比較の中で考えることになる。

5. 授業資料

この部分、あとの資料のページを参照のこと。

6. 授業に対する卒業生の声

本実践報告をまとめるにあたり、甲南大学の教職課程卒業生(国語)で、現在教諭として勤務している数人に、アンケートをお願いした。アンケートの内容は以下の通りである。

アンケートの内容

- 1) 卒業年(20)年3月
- 2) 現在勤務している校種 中学校/高等学校/その他()
※該当するものだけを残してください
- 3) 「国語科教育法Ⅰ(前期)」の授業を振り返り、現場に立っている今の視点から、思うことを自由に記述してください。箇条書きでも問題ありません。字数などは特に指定しませんが、200字程度を目安にお願いできれば幸いです。

非常に忙しい時期でもあるので、回答については無理をしないようお願いをしたが、複数の回答を得ることができた。

連絡のつきやすさなどから、2019年3月卒業⁸から集中的に回答があり、また、少し校種が偏ったが、以下に紹介したい。

教員 A

- 1) 卒業年 2019年3月
- 2) 高等学校

⁸ このメンバーが受講した2017年度の内容も、本報告の内容とほぼ同じである。

3) 国語科教育法の授業では、国語教員として必要な基礎知識を身につけるとともに、教師として働く上で身を助ける能力を養うことができた。

国語便覧に書かれている程度のことは何を聞かれても全て覚えているということが自信につながり、授業内外での生徒とのやりとりを堂々と行えた。

教員 B

1) 2019年3月卒

2) 中学校

3) 現場に出てからは他の先生の授業を見られる機会は多くありません。自分が明日する授業に追われる日々が続きます。そんな時に学生時代に友人たちと考えた授業案などが活きました。教科書の内容は違うかもしれませんが、説明的文章や物語文、随筆などジャンル毎の引き出しが増えました。大学在籍中は苦しい思いをしたものですが、今思い返せばその全てが財産です。

教員 C

1) 卒業年(2019)年3月

2) 現在勤務している校種 中学校

3) やはり、専門知識というところで、国語科教育法で学んだことが活かされる場面が多いです。作品を読み味わう上で必要な、人物の関係性や置かれていた状況などの背景まで迫ることで、より一層作品を深く味わうことができました。

また、国語便覧から得られる知識を紹介することで、生徒が国語に興味を示してくれていて、非常に役立っています。

授業の際にも、教科書本文の内容だけでなく、それに付随する生徒の興味がわきそうな情報を紹介することができるようになり、授業力の向上にもつながったと考えている。

教員 D

1) 卒業年 2019年3月

- 2) 現在勤務している校種 中学校
- 3) 「国語科教育法Ⅰ(前期)」振り返り

教えていただいた教材研究の基本の流れを今でも大事にしています。

- ①教材選定の妥当性
- ②教材を読む
- ③教材を知る
- ④教材を概観する
- ⑤教材を精読する
- ⑥教材の教え方を考える

今年から教科書が変わり教材研究を一からやり直していますが、教えていただいたことを常に意識しています。

特に、1年目の時は次の日の授業を考えるのに必死でつつい「②教材を読む(筆順・言葉の意味を全て説明できるか・背景を全て把握しているかなど)」を疎かにしがちでした。しかしそういう荒い授業準備では冷や汗がでてしまったりすることがありました。生徒に考えてもらう前に、まずきちんと文字と言葉を教え、語彙力を大事にしなくてはいけないと感じています。

大学生の時は⑤と⑥が教材研究のメインだ！本番だ！と思っていましたが、地味に見えていた①②③ができてこそだと現場に出てわかりました。面白く、でも基本はしっかりやる授業のためにこれからも大事にしていこうと思います。

7. 担当者のふりかえり

着任後すぐは、授業計画や運営も手探りのところもあったが、教科書の変更などを除けば、基本的な方向性は変わっていない。シラバスや配布プリントは、毎年見直しを行い、改善を行った。

着任後数年で、「国語の教職課程は厳しい」「便覧のテストをクリアしないと単位もらえない」「ほんとうに落とされる」「残れば教採に合格できる」ということが学生たちの間に広まった。このため、とりあえず免許だけ、という履修者は年々減少し、最終的にはほとんどいないという状態になった。3年生の前期の

段階でこのような関門を設けたのは、教員養成課程を離れたあと、就職活動のスタートが遅れないようにという配慮からである(最初の年は、3年後期に関門を設けたため、就活に影響が出た)。

厳しい指導を貫くことができた背景には、教職教育センター全体の指導姿勢がぶれなかったこと、および、日本語日本文学科の教員の理解と協力が得られたことがある。

単位不認定となった学生とはゆっくり話す機会を持つようにした。当該学生にも担当者にも辛い時間だったが、今振り返っても、間違った指導だったとは思わない。教師になりたいという気持ちだけでは、教師にはなれない。採用試験を突破することはできないし、教壇に立ったとしても、長期に渡って苦しむことになってしまっただろう。それより前に教育実習でトラブルとなったかもしれない。

採用試験の合格者数という形で結果が出たこともあり、幸いにも多くの方々の支持をいただきながら、国語科の教職課程を運営することができた。今回、このように振り返ることで、周囲の理解に支えられていたことを再確認できた。また、厳しい指導にもかかわらず、応えてくれた受講生たちにも改めて感謝の気持ちを伝えたい。

8. おわりに

以上、甲南大学における「国語科教育法Ⅰ」の実践を報告してきた。7年という在任期間に、多くの学生を中学校・高等学校国語科教諭として、現場に送り出してきた。中にはさまざまな理由ですでに教壇を離れた者もあるが、大半は今も現場で毎日生徒たちと向き合っている。

教育現場の抱える問題は多岐にわたっており、働き方改革が進まない分野であることも指摘されている。教職は聖職ではない。よい意味でのプロ意識を持って、生徒といっしょに成長して行ってほしい。

また、自分自身も、今後とも、学生とのまなびあいの中で、自らを変える必要があればそれを厭わない教育者でありつづけたいとの思いを新たにしている。

次ページより別紙資料

資料1 オリエンテーション配布プリント

資料2 予習プリント

資料3 後期へのつなぎプリント

※すべてオリジナルとはレイアウト変更あり

資料1 オリエンテーション配布プリント

国語科教育法 I

吉村裕美 よしむら ひろみ メールアドレス<消去>(登録を)

1. 担当者自己紹介
2. 授業内容(シラバス内容)確認

基本的に「反転型授業」=予習が前提となっている。

「小テスト」については後で確認

3. 受講者自己紹介

設定=中3もしくは高1(どちらでも可)の4月の最初の授業
生徒たちを前にして、あなたがこの一年間でどんな「国語」の授業を提供
するのか、その概要をわかりやすく示しながら、自己紹介する。

○あなたの「国語」という科目へのイメージを入れ込むこと。

○自分がどんな教師でどんな授業を理想としているのかを伝えること。

時間は3分程度

4. 「小テスト」について

国語教師として、知っているべき基礎知識をチェックする小テスト

作成・実施・採点・返却・答え合わせ

20点満点 5分間 秘密を守るのも教師への第一歩

★「国語教師として、知っているべき基礎知識」とは？

ディスカッション→担当決定

注意

教職教育センターの授業であり、出席が重視される。無断欠席は厳禁。

介護等体験は事前に必ず届け出ること。

不在の間に課題が出ていないかを確認し、次回の授業に支障がないようにすること。指導員の〇〇先生の指導は、この授業とセットであると認識して積極的に受けること。

国語教育研究(〇〇先生)、国語科教材研究(〇〇先生)は、重複が無い限りできるだけ受講すること。※教員氏名削除

資料 2 予習プリント※実際は1回についてA4で1枚

第1章 国語科の制度－学習指導要領と教科書

<課題>

2人(または3人)でグループを作る

次の授業中に p.19 の課題 2 を行うので、協力して比べるための教科書 2 冊を用意する。

(条件などは p.19 で確認すること)

自分が使っていたもの、教職センターにあるもの、日文共同研究室にあるものなど。

持ってくる事ができれば、冊子体で持ってくる。無理な場合は目次をコピーしてくる。

→次週の授業中に比較検討し、その内容をグループでまとめる

※注意：比べられないものを持ってきても活動ができないので、
しっかり条件を揃えてくること。

第2章 発問・指示

※教科書がいつも正しいとは限らない、一つの立場であると認識しよう。

批判的な読み方があってもよい。→この文言、実際はこの後毎回あったが
以下略

<課題 1 >

この章の記述で特に気になった(納得した/納得できなかった)ところを3カ所抜き出し、なぜそこを選んだのかをメモしよう。→グループ活動でディスカッション

<課題 2 >

教科書 p.30 課題 2 について、過去の経験などを思い出しながら箇条書きで書き出してみよう。※課題 1 のディスカッションでいっしょに話し合ってもよい。

第3章 板書・ノート指導・ワークシート

<課題>

教科書の内容をしっかりと読み込んで

p.40の課題2をやってみよう。

実際に生徒に配るプリントを作成する

Bサイズ(B4もしくはB5)で

4部用意

次週、実際に生徒に指導をするシミュレーションをやってみる

「よし、ノート作るぞ!」と思ってもらえる工夫を!

第4章 「話すこと・聞くこと」の授業

<課題1>

p.48の「(2)絵を説明する」の⑤の活動で使うことができそうな絵を探して来る

2部コピー →次週実際にやってみる

<課題2>

p.53の1行目「文化祭の出し物」という論題でブレイン・ストーミングから会議へという例が出ているが、この活動を具体化して、流れ図にしてみよう。

- ・設定は高校1年生
- ・総時間数は3時間(3コマ)
- ・だいたいの流れを(指導案でなくてよい)わかりやすくまとめる

説明しやすいようにまとめかたを工夫しよう

4部コピー →次週相互発表・批評

第5章 「書くこと」の授業

<課題1>

p.67の「生活綴り方運動」について調べてくる。

ネット情報を否定はしないが、できるだけ国語教育関係の事典や書物なども見てみる。次週→それぞれが調べた内容を紹介する

(レジュメまではよいが、メモかコピーは持参すること))

※『国語教育辞典』『国語教育総合事典』など国語教育系の(辞典)事典がある

<課題2>

p.68の課題の2にある「相互評価表」(ワークシート)を作成してみる。

指導案をよく見て、必要な項目を考えよう。

中学2年生が取り組みやすい工夫を。

★各自前提として新聞の投書欄をチェックし、最低1つ記事を切り抜いてこよう。

ワークシートは、Bサイズで作成。4部コピー → グループ活動

第6章 「読むこと」の授業

<課題>

村上春樹「鏡」について

(教科書 p.71 への「レキシントンの幽霊」の場合を参考にしながら)

教材研究をしてくる

自分なりの教材研究の過程を持ち寄る

手書きノート(ルーズリーフや方眼紙なども可)のコピーを4部用意

→次の時間持ち寄ってお互いに説明をする

グループで単元指導案を協議しながら作成する作業を行う

第7章 言葉を育む詩歌の授業

<課題>

光村中2の「新しい短歌のために」馬場あき子

「短歌を味わう」

この二つを一つの単元として指導する「単元指導案」を

p.92 への指導案を参考に作成してくる(9と10の「本時」についての部分は略)

※12章の「学習指導案の書き方」も参考にしよう

4部用意→次週グループで相互発表

総時間数は各自自由に設定してよい

すべてを扱う必要はない(必要に応じて取捨選択してよい)

第8章 古典の授業

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の扱いと言語活動

<課題>

自分とゆかりのある地域に関連する古典教材を探し、教材プリント化したものとそれを元にした授業展開をまとめたもの

(流れがわかればよい。単元指導案を作成してもよい)を用意
教材・授業展開 それぞれ4部

この章の内容をしっかりと読んで、古典嫌いを作らない工夫を

中1～高3までで学年設定も任せる(適切な学年を設定)

→次週お互いに発表

第9章 日中漢字文化を生かした漢字・語彙指導

<課題1>

「創作漢字コンテスト」(産経スクエア)について調べ、教科書の内容も参考にしながら、このコンテストへの応募につながるような授業展開(アイデア)を考えてみよう。

※課題2とあわせて配布プリント作成

<課題2>

漢字だけでなくさまざまな文字種がいっしょに使われるところが日本語の表記の特徴である。この特徴を生かした授業展開(アイデア)を考えてみよう。

★どちらも指導案ではない。こんな授業もできるかも?というアイデア(ターゲットの学年は明示すること)を出そう。最低各1つずつ。複数挙げてもよい。発想を柔軟に。

課題1と2を併せてA4 1枚～2枚程度にまとめて 4部用意

→次週発表

第10章 教室での豊かな交流活動ーグループ活動の進め方

<課題>

p.137～138で紹介されている「グループ学習の主な手法」の中のどれかを使っている中学校または高等学校国語の実践例を探し出し、そのおもしろいところ、改善の余地があるところなどをまとめて紹介する。

A4 1枚～2枚 4部用意。

オリジナルの資料などを配布するかどうかの判断は任せる。

ネット情報でもよいが、しっかり探してできるだけ良いものを見つけてくること。

第11章 国語科の評価

<課題>

配布した伊勢物語の第6段(芥川)を使って「観点別評価」による学習指導案を作成してみよう。教科書 p.139～141の例にならって、単元の指導計画を作成する。

「評価」という面を意識しながら作成する。

古典嫌いを作らない授業を！

高校1年生 クラスなどは適当に設定

総時間数3時間

★教科書の例にならって「本時の指導計画」などは省略する。

★「5. 単元の評価規準」について

ふつう観点は3つ程度設定するのだが、練習のため、5つすべてを使う。

教科書のように、罫線で囲んだ表形式にしなくても簡条書き的に示してもよい。

(例)○関心・意欲・態度【関】

国語に対する関心を持ち、積極的に…

○話す・聞く能力【話・聞】

作品を読んで得た自分の感想を…

<以下同様>

指導案の下に次の内容をメモ的に添える

- 1)工夫をしたところ(授業展開・評価など)
- 2)評価を行うときに困難が予想されるところ

4部用意する

◎よい機会なので、この本文をきっちり文法的に分析(=品詞分解)し、復習をしておこう。

第12章 指導計画・学習指導案の作成

<課題>

p.148「年間指導計画」を立案するため、次の準備をしてくる。

今回は、教科書に併せて、全員高校で作業を行う。

それぞれ出身高校のHPを確認し、各高校の特徴や校訓、カリキュラム、年間行事計画などを調べてくる。(手持ちのコピー1部だけでよい。レジュメ作成不要)

それぞれ自分の学校の特徴を口頭で説明できるように頭を整理しておく。

→次週、それを元に、国語総合の年間指導計画を作成する。

第13章 授業を研究して育つ教師—教えながら学び育つ教師

<課題>

各自、この章の内容および前の章の学習指導案の書き方をよく読んで、

後期の模擬授業で自分が扱いたい教材を見つけ、どういう単元にしようとしているのか 粗い状態でよいので、1～8までの内容を書いてくる(「本時」は不要)。

教材は手持ちの1部でよい。

指導案は4部用意→来週相互に発表、アイデア交換

資料3 後期へのつなぎプリント

国語科教育法Ⅱ後期に向けて

後期の活動と前期これからの課題

後期の授業の中心＝模擬授業

- ・指導案(細案)は50分書いてもらうが、実施は何分になるか未定
 - ※実際は人数が絞られ50分で模擬授業を実施できた
 - ★1回だけでは経験不足なので、各自別途練習の機会を持つこと。
- ・授業を行った教材に基づく定期考査問題作成と採点評価
 - ★考査を実施し、評価できる教材を選ぶこと。

7/12 先輩学生から教育実習について聞く

次々回7/19までに

後期、自分が模擬授業で扱う教材を見つける→1部コピー

基本的に自分が教育実習を希望している校種(中または高)のもの

中学校教科書：センター・日文共研にあるものが最新

高校教科書：センターのものが最新

単元が3～6時間で構成できるものを選ぶこと(実習を意識)

何らかの形で考査を実施し、評価できる教材を選ぶこと

まずはしっかり教材研究→自分の力で教材に向き合うことの重要性

7/19までの宿題

各自、しっかりと教材研究をしたうえで

指導案を作成してくる。書式は指定しないが必要な項目があるものを。

教科書の見本などを参照する。

今回は単元指導計画だけでなく、「本時」まで(どれか1時間を選ぶ)。

7/19は

教材を1部、指導案を必要部数

高校A班4部、高校B班3部、中学は1グループで5部

→各自説明をして、ダメだししてもらう→24日に改訂案→夏休み中に

さらに改訂

7/24(火) 教材研究の続きと前期のふりかえり 指導案必要部数(19

に同じ)

夏休みの宿題

指導案を改訂してくる

後期最初の授業 受講者確認、模擬授業準備(受講する場合は休まないこと)

教材を1部、指導案を必要部数コピーして持参

→もう一度各自説明をしてダメだししてもらい→模擬授業までに改善

前期国語科教育法 I の単位が万一取れなかった場合

すみやかに吉村(メールアドレス削除)と連絡を取り、今後のことについて相談